

角川とは地名ではなく、この施設の設置に多大な寄付を下された角川文子さまの名前を取ったものである。角川文庫の角川家であり、富山出身。

介護保険がスタートし、最初の課題は保険料の設定や公平・中立な介護認定もあったが、普及させて利用して頂くことでもあった。利用するのに、家の前まで車を付けてくれるな、利用が悟られてしまう、という時代もあったが、次第に定着してきた。

第2期の計画に移った際、介護保険料をどうするかという議論があったが、当然、1円でも安い方が良いという議論が起こる。一方で、質の充実も求められる。そこで、介護予防の必要性が認識されるようになった。その当時、予防に特化した施設は全国的にも殆ど存在しなかった。

ドイツでは水中運動や温熱療法などの予防が保険の中に組み込まれており、自治体ごとのプランを国に申請して、適否が判断される。それをモデルとして、介護予防を導入した。富山型デイサービスなど、先駆的に取り組んでいたという地域性もあった。

食の楽しみや文化的な取り組みを採り入れることも検討されたが、それは民間で出来ることだと判断され、現在の形に落ち着いた。なお、小学校を統廃合した跡地が活用された。コンパクトシティ構想もあるため、街の中心部に置かれることになった。

当初は65歳以上の方を対象にスタートしたが、メタボやロコモなどを考慮し、40歳以上も含めることになったが、現在の利用者のうち全体の10%程度に相当。市内35ヶ所(32ヶ所?)の包括支援センター全ての地域から訪問される。一般会員は約450名。毎日250名の利用があり、年間では8万人に及ぶ。なお、料金は基本で月額7200円。

最高齢は94歳、平均年齢は75歳。運転が出来なくなる方もいるので、脚の確保が課題である。そこで、バスを4台配備し、QOLツアーという形で、ドアトゥドアの送迎を行っている。

施設は年中無休。医師や栄養士も常駐。スタッフは何れも専門家であり、事務職は居ない。体力や健康状態を測定し、個別のメニューを提供している。

温泉療法の効果として、身体の硬さや冷えを解消させることに加え、精神的な開放感にも作用する。温泉は地下1200メートルから汲み上げている。(このあたりは、どこでも温泉が流れている。)プールの方は、足元が見えるように加水して薄めている。

一般的に、在宅に切り換えた途端にリハビリが出来なくなるという課題がある。デイサービスにリハビリ機能を持たせる観点からも、パワリハの活用。日頃は使わない筋肉を使い、呼び起こすことで、多くのスムーズな運動が可能になる。指導者の育成が課題であった。PTの配置。

二次予防事業の対象となる方の5%程度が利用していると考えられる。施設自体の混雑状況には、まだ余裕があるが、QOLツアーでバス送迎を行って、教室を実施する観点からすると手一杯。他に類似の施設を作る財政的余裕は無い。本来の趣旨は、この施設での経験を元に、運動の習慣を身につけてもらうことである。

指定管理での運営。2団体の共同運営。マネジメントと医療系。市からは1億1千万円、収入が7千万円。その半分は人件費である。